

Title	1 キンシコウのone male unit間の非敵対的關係(XI.共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	和田, 一雄
Citation	霊長類研究所年報 (2007), 37: 118-118
Issue Date	2007-07-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/166420
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

知状態語), 機能(慣用的表現, 心的状態を表す表現, 心的状態と現実の対比を表す表現), 対象(子供, 母親, 絵本の登場人物)の項目においてそれぞれ分類された。

子供の認知状態語彙の使用頻度は3歳以降増加し, 子供の使用が開始される約半年前から, 母親は認知状態語の使用頻度を増加させていたことが分かった。認知状態語彙の三つの機能に関して, 母親は最も高度で使用開始時期が遅い「心的状態と現実の対比を表す表現」のみを, 子供の加齢に伴い増加させた。3歳以降, 子供は自己のみならず他者の心的状態に関する言及を開始し, それに伴い母親は子供にとって他者にあたる自身の心的状態について言及を開始した。以上の結果より, 母親は子供の心的語彙の産出レベルに合わせて自身の心的語彙の複雑さを調節している可能性, さらに子供の心的語彙産出レベルをやや上回るインプットを与えていた可能性が部分的に支持された。

5-4 他者を助ける状況下での幼児の誤信念理解

末永芙美(神戸大・文)

対応者: 松井智子

コミュニケーションを成立させるために不可欠とされている他者の意図理解能力を可能にする心の理論の発達初期段階にある3才児は, 他者の誤信念を理解できないと報告されてきた。このことは, 幼児が1度に2種類の異なる表象に対処できないことに原因があると言われてきた。しかし, 最近では3才児の潜在的レベル(目線など)での誤信念理解が示唆されており, また, 乳児は18ヶ月頃までにはヒト特有の他者と関わろうとするコミュニケーションの姿勢を持ち合やすようになるとの報告もされている。本研究では「他者を助ける」という状況を与えることで, 3才児の潜在的な他者の誤信念理解を促進できると仮説し, 実験デザインを構築した。本来は抑制しなければならなかった表象からの情報を他者に伝えることで, 他者を助けることができる状況下で, 幼児は誤信念理解ができているということが結果として示された。

(2) 施設利用

1 キンシコウの one male unit 間の非敵対的關係

和田一雄

対応者: 渡邊邦夫

一般的にキンシコウは one male unit(OMU)の集合である band で遊動する。その際, OMU 同士は空間的に混合することなく, 時には敵対的な交渉を行いつつ, band として統合されている。餌場では個体間距離が狭く, 敵対的な交渉が頻発するが, 林内では少ない。互いに出会いを避けあっているからであろうが, band として同一行動をとる社会的関係は何かを知る必要がある。

2001年から2005年にわたる調査で, 2002・2003の両年3-4月にOMU間で友好的な出会いが観察された。10-12月には観察されなかった。3-4月は出産期なので, 新生児を抱いた, 母親以外のメスが他のOMUに入り込むのだが, そのときはメスと新生児を受け入れ, 新生児を抱き取り, メス間でも毛づくろいをする。新生児を媒介にしてOMU間に友好的な出会いが生まれるのである。2002年には5例, HT-BZT, JZT-TT, HT-ZZで各1例, HD-DZで2例が観察された。2003年には13例, その内訳はDB-DZが11例, DB-TT, HT-LPが各1例であった。頻発したDB-DZは下位のrank間であったが, HT-BZT, HT-ZZなど上位・下位のOMU間の交渉であった。交渉を行うOMU間には特定の意味を持ちにくい。たまたま, 空間的に隣接していたOMU間での交渉という, 偶発的出会いであったのかもしれない。

2 高崎山ニホンザル雌の栄養状態の把握について

栗田博之(大分市教育委員会)

対応者: 濱田穰

これまで, 高崎山の餌付けニホンザル群の個体群管理のため, 成熟雌の栄養状態を把握するためのデータ収集を行ってきた。平成14年度から平成17年度までに成熟雌を対象に収集した, 9月時の体長(m)データと10月時の体重(kg)データから, のべ79個体分の体格指数(体重を体長の自乗で割ったもの)を求めた。その結果, 最小値は27.3, 最大値は37.3であり, 平均±標準偏差は32.6±2.29であった。また, 平成18年度にも, 体長を28個体から, 体重は36個体からデータ収集を行った。

今後は, データ収集を進めてさらに標本数を増やし, 体格指数と翌年出産率や子の生存率との関係や体格指数の経年変化を調べることで, 高崎山個体群管理に役立てていきたいと考えている。